〈研究ノート〉

# 二つの貝塚碑の人びと

## ― モース博士と東大予備門生達 ―

岸井　貫

### 一、モース博士と「東京大学」

エドワード・S・モース（一八三八―一九二五）博士は腕足類（三味線貝・ほおづき貝など。現在は「触手動物」に分類される。）を研究するために明治十年（一八七七）六月に来日し、程なく大森の貝塚を発見した。また同じ頃に東大の動物学科教授に招かれ、着任した。学生達を教える傍ら大森貝塚を発掘し、多くの遺物と知見を得た。これは日本での初めての科学的な発掘と言われ、考古学の端緒となった。得られた土器の縄の圧痕が「縄文土器」・「縄文時代」の言葉の元になった。また特に「進化論」を日本に拡めた。一時帰米の時期を挟んで明治十二年九月まで在任した。三年後に明治十五年から十六年にかけて、日本の陶磁器などを収集する目的で重ねて来日した。

来日直前の明治十年四月に東京開成学校が改組されて東京大學（南校）になった。次いで十二月には開成学校普通科（予科に相当する）が隣接していた東京英語学校と合併して東大予備門となり、東大の一部門とされた。当時は組織の整備に急であったためか、東大の教授が予備門の教職を兼ねる例が多かったが、特にモースの招聘に動いたり、大森の発掘に従事したりした人々が、余り年数を措かずに予備門に勤めたと言う事実がある。また教室の卒業者がすぐに準助教授に任ぜられ、予備門の教職を兼任したこともあった。その影響であろうか、この時期の予備門生徒で発掘・考古学に関心を持つものが多かった。

しかし他方では、モースの弟子達のうちで後々まで考古学に専念する者は居なかった。これは当時がダーウィンの進化

論が提出されてまだ二十年に満たず、考古学がまだ科学としても、「学科」としても確立していなかったことが一因であったろうか。

これに反して、東大で本来の教科として教えた動物学の面では、モースの影響が後々まで残り、進化論と密接な関係にある分類学に力を注ぐ人が多かった。このことは臨海実験所と海棲動物研究の面で比較的はっきりしている。

これらの事情を今振り返ると、何れにしても学校の数も生徒の数も少なかったために、学校を介しての生徒間、教師ー生徒間の結びつきが強かったと感ずる。

本稿ではモース博士・大森貝塚発掘と東大予備門（および）その前身としての開成学校普通科・東京英語学校と、後身としての旧制第一高等学校）の生徒達との関わりを軸にして記す。

当時の東京大學南校（法・文・理三学部）は現在の神保町辺の南方、一橋通りからお濠端に到る地域にあったが、その後、東京大學本部と三学部は明治十七・十八年に本郷へ移り十九年に「東京帝国大學」と改称された。同十九年に予備門は東大から独立して第一高等中学校になり、二十二年の向ケ岡弥生町（現・東大農学部の位置）への移転、二十七年の第一高等学校への改称を経た。

## 二、東京大学時代のモース

モース着任当時の東京大學では、南校の三学部を大學綜理の加藤弘之と綜理補の浜尾新（明治十ー十三年に予備門主幹・初代教頭を兼任。後に東大総長・文部大臣）・服部一三（東京英語学校長を経る。予備門主幹兼任。後に地震学会会長）が管理していた。生物学部門では植物学教授として矢田部良吉（明治十三年頃予備門教授。後に東京高師校長）が決まっていたけれども、動物学教授を求めて一、二の候補者と交渉を進めていた。外山正一（当時東大教授。明治十九ー二十二年に一高文科教授。後に東大総長・文部大臣）がモースを招聘するために接触した。「若い日本人が来て東京の帝国大学の学生のため講義してくれと招聘した。…彼はかってミシガン大学で私が講演したことを語った。その夜私はドクターIIバーマーの家で過ごしたのであるが、その時同家に止宿していた日本人を覚えていないかと言う。…彼は今や政治経済学の教授なのである（モース）。」

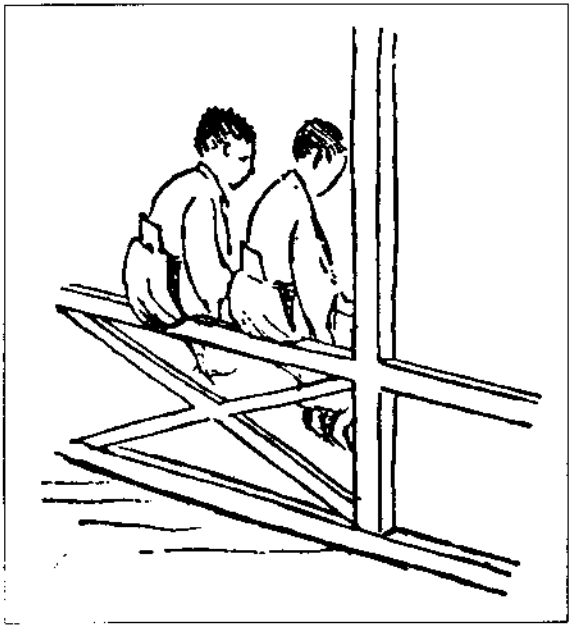
モース等外人教授は現在の東大本郷地区にある教師館に住んでいた。「今、私は加賀屋敷五番館に落ち着いた。これは日本人が建てた西洋風だと言うことになっている（モース）。」

モースは腕足類を採集・研究するために江ノ島に臨海実験所を設けた。「私をして日本を訪問させた目的物すなわち腕足類を捕らえようと網を入れた。第一回の網に三十も入っていたのだから、私の驚きと喜びは察して貰えるだろう（モース）。」

モースの初めての講義は九月に「予備門（正確には開成の普通科または英語学校であろう）」の生徒を対象にして行われた。「大學の大広間で第一講をやった。米国のような宗教的偏見に衝突せずに進化論を説明するのは誠に愉快だ。私は類の熱するのを覚えた。日本人は電光のように素速く私の画を理解する（モース）。」

その後のモースは予備門・生物学科・地質学科の生徒に対

第1図　江の島臨海実験所内の作業（モースのスケッチ）
中央：松村任三　右：外山正一



第2図　「予備校」の生徒達（モース）

して講義をした。「これ程熱心に勉強しようとする良い子供達を教えるのは実に愉快だ。」「日本服を着た学生が英語の教科書を使用しているのを見ては、一寸妙な気持ちがせざるを得なかった。この大学には英語を勉強するための予備校が付属しているので、大学に入る学生は一人残らず英語を了解していなくてはならない。」「図は予備校へ行っている少年達を写生したものである。彼らはここで大学へ入る前に英語を学ぶ。私はよく実験室の窓から彼らを見るが、まことに眉目麗しく雄々しい連中で、挙動は優雅で丁寧であり…」

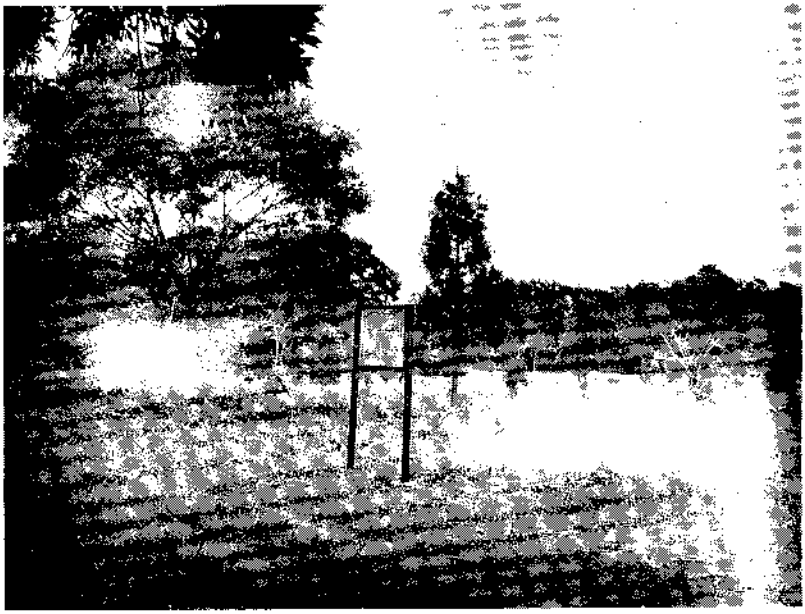
大学綜理加藤と綜理補の浜尾は日常業務と臨海実験所設置・大森貝塚発掘に関する事務について頻繁にモースとの交渉があった。モースが率直かつ親しげに経費支出を要請するので、拒むすべがなかったと加藤が述懐した。彼等がモースと各種行事に同行することも多かった。

矢田部良吉はモースの同僚に当たる。通訳をしての助力が多かった。後に発行された大森貝塚発掘報告を和訳した。明治十一年にモースの発案で東大生物学会（日本動物学会の前身）が組織され、矢田部が会長に撰ばれた。

幕末から明治初年にかけて外国人達が日本産植物の標本を自国へ持ち帰っており、日本の研究者が新種の記載をする前に照合する必要があって非常な差し障りになっていた。矢田部は「泰西植物学者諸氏に告ぐ」として「日本植物の研究は以後欧米植物家を煩わせずして日本の植物学者の手によって解決せん」と宣言した。これによって日本での新種の記載・発表が進んだ。明治十五年に外山・井上哲次郎（東大教授・哲学者）と共に「新體詩抄」を撰し発行した。

高嶺秀夫は慶応義塾・文部省を経てモースの助教授となる。助教授時代に予備門を教え、生徒に初めて解剖をさせた。生物学会創立に関わる。後に高師・女高師校長を歴任する。

松村任三（じんぞう、明治九年開成法科予科卒。十四―十九年に予備門動物学教授。後に東大教授）は大學植物園で矢田部の手伝いをしており、モースの着任に際して助手に任命された。大森貝塚の発掘に従事し、モース不在の期間の発掘も主導した。「私の助手の松村を招いて石油洋燈を享楽させた。彼は私の著した小さな動物学教科書を勉強しつつある（モース）。」その後ドイツ留学を経て助教授・教授となり、小石川の大學植物園の管理（園長相当）にも任じた。植物分類学の業績が大きかった。



第3図　陸平遺跡の現況
台地周辺の斜面に貝塚がある。

佐々木忠次（二）郎（明治十五―二十四年に予備門理科教授。後に東大農学部教授・昆虫学者）は明治七年開成学校に入学し、モースの最初の（専門）学生となった。大森貝塚の発掘にも従事した。モース離任直前の時期に同じくモースの学生であった飯島魁（いさお）とともに茨城県美浦村陸平（おかだいら）貝塚を発見・発掘した。得られた縄文土器の形式が大森のそれと異なることから、時期的な差があることを推定させた。現在の見方では陸平が縄文時代中期、大森が同後期に相当する。最近の発掘では大森に晩期の土器も多いことが知られた。

陸平の発掘は日本人だけによる発見・発掘の最初のもの、また縄文土器間の年代差を示唆したものとして学史的価値が大きいと認められている。佐々木は農学部教授として養蚕・園芸・農業関連の害虫の研究に従った。著書「蚕の姐」は養蚕業に大変役立った。その他この方面の著書の数が多い。

松浦佐用彦は明治九年開成学校「予科」卒。理学部に進む。大森発掘に従事したが、明治十一年に病死した。「今日松浦というはきはきした立派な男が特別学生として私に逢いに来た。…」「…私が殊の外愛していた松村が昨夜病院であの脚気という神秘的な病気（これはモースの思い違いでチフスで

あろうと言われる）が原因で死んだ（モース）。」谷中墓地に「東大有志」による墓碑があり、モースの英文の弔辞が彫られている。

飯島は卒業後間もなく明治十四－十五年と二八－二九年に予備門理科嘱託を努め、後に東大理学部教授・臨海実験所長となった（後記）。

岩川友太郎は「予備門の前身である開成学校（予科であろうか）」を卒業し大學入学を目指していた時にモースの講演を聴き、学生となった。卒業後東京師範教諭を勤めた。「生物学語彙集」を著し、学術語の訳語定着に役立った。

石川千代松（明治十一年予備門理科卒。後に東大植物学教授）は理学部諸学科に属したが、生物学科に出入りして事実上モースの弟子となり、しばしば通訳を勤めた。モースの講義の筆記録を和訳して「動物進化論」として配布・発行した。日本最初の進化論の書物である。昆虫学・水産学に進み、「上野動物園の育ての親」と呼ばれた。「昨日私は大隈氏の学校（東京専門学校＝早稲田大学の前身）の開校式で講演すべく招かれた。演題は進化論、すなわちダーウィニズムで私の以前の特別学生の一人である石川氏が私のために通訳した（モース）。」「先生は土曜の午後や日曜などには方々の子供を沢山集め、御自分が餓鬼大将になってよく戦争ごっこをして遊ばれた。神田の小学校で講演を頼まれた時、私が通訳を勤めた（石川）。」石川の同級生も多くモースの講義を聴いたであろうが、特に田中館愛橘（明治十一年予備門理科卒。後に東大理学部教授・文化勲章）の名が記録されている。最終的にはモース教室の学生は年度順に佐々木－飯島・岩川－石川の態勢となった。

種田織三は明治九年開成学校「予科」卒。生物学科助手となりモースの指導で標本整理などに当たる。

「これらの人々が如何にもいそいそと敏捷に学び手助けすることは驚くばかりである。佐々木は人力車で採集に出かけたが、車夫も興味を持ち出して採集したため材料を沢山持って帰ったと私に話した（モース）。」

これら弟子達はモース帰国後は彼らの本来の志望通り生物学へ進んだ。東大での考古学研究はモースと僅かの接触しかなかった坪井正五郎（明治十四年予備門理科卒。後に東大人

類学教室創設・教授。）が中心になって、後に再発足・発展させて行くことになる（後記）。

## 三、モースの周辺

その他に次のような関係者が記録される。

江木高遠は当時予備門の英語教師であり、明治十一年から「江木学校講談会」を開いた。モースはここで進化論の四回を含み十数回の講演をした。「私は御礼を呉れさえしなければ（講演を）やると申し出た（モース）。」「受持の先生がアメリカの偉い先生の講義を聞かせてやると言って十歳になるかならぬかの僕を連れて…講堂は東京英語学校の講堂でした（山崎直方。後出）。」講談会には当時の外国人教授の出講が多かった。一般の人々が外国の学問・技術の吸収に熱心であったと感ずる。江木について本紀要第二号が詳しい。

金子堅太郎（明治十一―十三年に予備門講師。後に農商務大臣）はモースに故郷筑前産の高取焼陶器のコレクションを贈った。日露戦争に際して米国に派遣され、米国人を日本に共感させるための活動をした。明治憲法起草者の一人であった。

杉浦重剛（明治十五―十八年予備門校長。東宮御用係・國學院学監・東亜同文書院長）は、モースが外国雑誌に大森貝塚発掘の成果を報告し論戦をしていた時期に、モースの論拠を保証する趣旨のコメントをネイチュア誌に寄せたと推測される（一八八〇年）。当時ロンドンに留学中であった。

モースは日本の「歴史」を根拠に、大森貝塚の年代を千五百年前より古いとした。これに対して当時の外国人の日本研究者は、日本歴史は神話に過ぎない、また土器が精巧なので千五百年前または千年前よりは新しいと論じていた。

有坂鉛蔵（明治二十年第一高等中学校理科卒。後に東大教授・海軍造兵中将）は石川の義弟であったためか、考古学に関心を持った。明治十五年（有坂は十四年と記しているが誤りと思う）に石川の紹介によりモースを教師館に訪ね、教えを受けた。大森貝塚へも伴われたという。明治十七年予備門生徒時代に、これも石川の紹介により坪井正五郎・白井光太郎（明治十五年予備門理科卒。後に東大農学部教授）と会い、ともに向ヶ岡弥生町（現・文京区）の貝塚を訪ね土器を発見した。この「弥生町土器」が「弥生時代」の言葉の元になった。

今振り返れば、モース・有坂の接触は「縄文土器」・「弥

生土器」の発見者二人が相逢った希有の機会であった。

有坂は「兵器考ー古代編」を著した。四十糎砲を搭載した戦艦の開発に携わった。

宮岡恒次郎（明治十五年予備門法科卒。後に駐米大使館参事官・弁理公使）は少年時代に東京英語学校に通学し、高嶺の書生をしていたことで、モースの教師館をしばしば訪れ、モースや子息ジョンと親しかった。モースが宮岡・ジョンを人力車に載せて曳き走り興じたとの逸話がある。駐米大使館の時代にもモースと親しんだと言う。

坪井正五郎は明治十五年学生時代に、駒場遺跡の出土品をモース・佐々木（当時駒場農学校／東大農学部の前身／教授）に鑑定依頼した。モースの講演も聴いている。後には縄文時代人がアイヌ伝説の「コロボックル」であると唱え、白井らの「アイヌ説」と論争を続けた。

白井は植物病理学を専門にしたが、一方で文献学的立場からの博物趣味・本草学的な異色ある研究を広く行った。考古学関係の業績（「石鏃考」など）もこれに含まれよう。

## 四、坪井をめぐる予備門生達

松村・佐々木・飯島・矢田部は明治十三ないし十五年に予備門の教職に就いた。学生達にとっては年齢差の少ない親しみやすい先生達であったろうか。その影響か、その頃の学生に考古学に関心を持つ者が多かったと有坂が回想している。坪井・有坂が挙げる同人は約十五名で、予備門・一高卒業者は、澤井廉（明治十四理科）・佐藤勇太郎（明治十四理科。後に海運事業経営）・井上圓了（明治十四文科。後に哲学堂・東洋大学創設。仏教哲学）・神保小虎（明治十六理科。後に東大地質学教授）・白井頼吉（明治二十工科。後に海軍佐世保工廠造船部長）である。おそらく予備門生・東大生双方とも関心を持っていた者が多かったのであろう。その中心的な存在が坪井であった。

坪井は始め東京近辺の貝塚を多く発掘して報告したが、ついで研究範囲を広めて行った。大学生時代に「東京人類学会」を発足させた。ここからは後に「考古学会」が分かれた。人類学教室を創設して鳥居龍蔵（後に國學院大などの教授）・松村瞭（あきら、松村任三の令息。後に東大人類学助教授）を始めとする多くの研究者を育てた。また他教室の在学生、例えば浜田耕作＝青陵（西洋史科に在学。後に京大教授・考古学教室創設・総長）・中山平次郎（医科在学。後に九大医

学部教授。考古学者）などとも接触し影響を与えた。大正二年に学会のためロシヤに出張して客死するまで、日本考古学界の発展に尽くした。「何故にこの学科を専門に撰びしや正しく思い出す能わず…余が幼時の博物学的傾向とモールス（当時の表記）氏・佐々木氏の動物学者なりし事実とが余をこの学科に導きしにや有らん（坪井）。」他方で、坪井が東京人類学会を発足させたとき、「我々はモースの影響を受けていない。」と強調したとも言われる。

「僕が中学生のころ、大学生であった坪井教授や第一高等学校生であった有坂閣下などの驥尾に附して遠足した。大森駅の少し北の所で…台地の斜面からその麓にかけて一面に介殻が露出していて…（山崎直方／なおまさ。東京人類学会草創期のメンバー。後に東大地理学教室創設。地質・考古学にも力を入れる。モース先生記念会代表）」

これと余り離れない時期には歴史学方面に三上参次（明治十八年予備門卒。後に東大歴史学教授）と白鳥庫吉（明治二十年一高卒。後に東大東洋史教授。東宮御学問所主任。邪馬台国九州説を唱え、大和説を説く内藤虎次郎＝湖南京大教授と論争をした。）とが在学したけれども、その後予備門・一高から考古学を専攻した人が現れるまで、後に記すようにしばらくの時を要した。

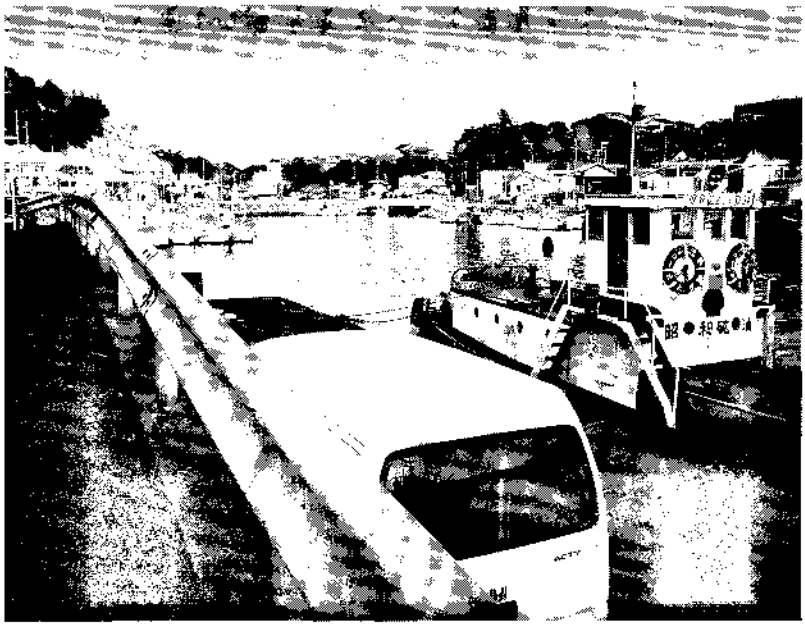
## 五、飯島魁と臨海実験所

飯島は海綿・寄生虫・鳥類の研究に従事し、日本鳥類学会を発足させた。モースの臨海実験所を三崎に移して建てる時に関わり、後に所長となった。「日本水族館の父」と呼ばれる。

箕作佳吉（坪井の義兄。石川千代松は親族に当たる。）がモースおよびその後任のホイットマンに次いで第三代の動物学教授となった。米国留学中にモースの師アガシーに就き、モースと兄弟弟子であった。モースが就任を打診した。臨海実験所は箕作が実兄の菊池大麓（当時理学部長）と諮り、日本の動物学を自立させるために研究を海棲動物に集中させようとする戦略で設けられたものである。モースが江ノ島の土産店でしばしば得た珍しい生物が三崎の産であったことから地を撰ばれた。城ヶ島に面した三崎漁港の東隣りの入江「北条湾」に面して建てられた。「明治十四年以降我邦における動物学の発達は主として吾人日本人の手にあり（箕作）。」

当時は箕作の弟元八（明治十三年予備門理科卒。後に史学に転じ一高西洋史教授）も動物学科に在学していた。

考古学界では飯島は余り関心を持たれていない。名前を出



第4図　旧臨海実験所付近から北條湾奥を望む。

したがらない人柄からだと評され、またモースとの間柄にこだわりがあったのではないかとの推測もある。

その原因の一つは、後の貝塚碑建設などの一連の顕彰事業が行われた時期よりかなり早く大正十年に死去していたことであろう。

また臨海実験所は、「お雇い教師」を減らしその影響から独立して学問を進めたい、という風潮のなかで作られたものであったから、モースとの関係を表面に出したがらなかったのかも知れない。同じことはすでに述べたように谷田部・坪井にも見られる。

しかし飯島の学風はモースのそれ（採集・分類・生態観察を主とする）に近くて、実験動物学を企画した研究には強く反対したと言われる。

臨海実験所は明治三十年に数キロメートル離れた油壺に移設された。東宮（昭和天皇）の生物学御研究所と協力しての活動も行われた。

## 六、次の世代の人達

中山平次郎（明治二十九年一高医科卒）は北九州地方での考古学的活動を続けたが、特に弥生土器甕棺墓を研究し、それらの副葬品から「弥生時代」が西紀元年を挟む時期である

として、実年代を確定した。これは間接的に縄文時代の年代の下限を与えるものであり、戦前の日本考古学において唯一の信頼できる実年代であった。少年時代に向ケ岡に隣接する西片町に住み、弥生町土器の出土地点を探した。「指導者といふべきものは遺跡および遺物であり、その第一指導者が向ケ岡貝塚である（中山）。」学生時代に坪井に発見当時の状況を聴いた。「廃滅せんとする遺跡から（弥生町）土器が得られたのが奇異に感じたから、坪井先生に伺ったところ有坂君が崖ぎはから抜き出したといふておられた。ここは高等学校の外囲に近接して居るから一高入学以来構内を探したが、遺物をみつけたことは一回もない。却って大学構内の裏門近くで打製石斧を拾ふたことが二度程ある。」

縄文時代の実年代は、当時漠然と三千年前と考えられていたが、理化学的・比較年代学的根拠はなかった。第二次大戦後の放射性炭素を用いる方法で初めて一万二千年前ないし二千数百年前という古く且つ永く続いた年代値が与えられた。大森貝塚の年代は、偶然であるが「三千年前」として大きい誤りがないことが解った。

長谷部言人（ことんど、明治三十五年一高医科卒。東北大医・東大人類学教授。考古学者）は、京大・東北大の経歴を持ち、それぞれの大學の考古学的成果に通じており、その上に自分の仕事を積み上げた。氷河時代終末期（当時の年代観では約一万年前）に人類が大陸から日本へ渡来し、以後は生活・文化の変化に伴って骨格を変えてきたのであり、縄文人・弥生時代人が「日本人の直接の先祖であると断言し、当時の主流説に反旗を翻した。」と評されている。東大に放射性炭素法を導入するときに計画を主導した。

原田叔人（明治三十八年一高文科卒）は坪井・長谷部が理学部人類学科で活動したのに対して、文学部に考古学教室を創設して研究した。東洋史と西アジアの発掘・研究、西都原古墳群・平城京・高松塚の研究を主導した。特に古代ガラスに関心を持っていた。

松本彦七郎（明治四十一年一高理科卒。東北大理学部教授）は化石・古生物の研究を行ったが、東北地方で長期に亙る貝層が積み重なっている貝塚（大船渡市の大洞貝塚など）を取り上げ、化石研究の手法を適用して土器の含まれる層序と土器形式の変遷との関係を調べた。土器紋様の発現・変遷・衰退・消滅と生物器官のそれとの類似を論じた。土器形式変化の時代的な連続性は、人種交替の可能性を否定することとな

り、それまでの縄文時代人人種論の意味を失わせた。松本は縄文時代人が「他人種を順次同化させて来たと唱えて強い衝撃を与えた。」と評される。彼の層序を重視する研究方法は年代を問わず考古学の基本的なものになっている。

クモヒトデの分類を研究していた時期に飯島と交渉があった。

## 七、記念碑など

モースは日本時代の日記を纏めて「日本その日その日」を大正六年に刊行した。石川教授の令息欣一氏が和訳し、それに石川が序言を寄せた。また和訳書の発行に宮嶋幹之助（明治二十八年一高理科。東大生物学卒。慶大教授・寄生虫学）の協力があったと記される。

モースは帰米後にセーラム市のピーボディ科学アカデミー（現・同博物館）館長を勤めたが、日本人への好意・関心を持ち続け、米国への日本の紹介に努めた。関東大震災で東大が被災したと聞き、自分の蔵書を死後に寄付することを取り決めた。

モースは大正十四年に死去し、また昭和二年が大森貝塚発掘五十周年に当たった。考古学界で追悼誌・記念誌の発行があった。

松村瞭は当時東大人類学教室で「人類学雑誌」の編集に当たられた。「（大森貝塚発掘の）同行者は私の親父と学生二名とあるが佐々木先生と松浦氏とである（松村）。」

東大内にモースが描いた教師館と同じ形の建物を見付け、これがモースの住んだ五番館であることを確認した。有坂が資料を持って訪れたが、教師館の形が自分の記憶と違うと言う。再び調査して有坂の記憶のものもあるのを見つけ、モースが再来日した時の住まいであったことを同じく確認した。「大學の朱門をくぐると何とも言えぬ昔懐かしい感じが私の頭に浮かぶ。天文台に近い教師館にあの敬愛すべき博識なモールス先生は住んで居られたのである。…先生は子供が好きであった。私どもにさえも丁寧に教えられた（有坂）。」

大森貝塚の記念碑がＪＲ東海道・京浜東北線沿いの西側に大井町駅寄り（大森貝塚碑。品川区大井。昭和四年建設）と大森駅寄り（大森貝墟碑。大田区山王。昭和五年建設）とにある。

佐々木は貝墟碑がある地をかっての発掘地と考え碑の建立を考えていた。「佐々木博士が見え、庭内を散策された折り、二又の松を眺め、この松の下でモース先生と弁当を食べ近く

を掘られたと言われた(臼井米次郎／貝墟碑の敷地提供者)。」

しかしその実現前に本山彦一（大阪毎日新聞社主）氏が有坂に委託しての貝塚碑が建てられた。「明治十年余東京にあり…（大森貝塚発掘の）事実を聞きかつその実物を見て興趣を覚ゆること甚だし（本山。史前学雑誌建碑記念号）」関係者九名のうち予備門関係は有坂・佐々木・宮岡・石川・岩川である。その他は小金井良精（東大医科解剖学教授。古人類学）と大山考古学研究所（大山柏・杉山寿栄男）である。

本山は別の文章では発掘当時はあまり関心がなかったと言っている。前記の文章は建碑当時の心境を昔に投影したものであろうか。本山は考古学研究の熱心かつ有力なパトロンであった。研究報告類の出版に特に尽力した。

モースと門下による複数回の発掘のうち、多くは貝塚碑の地域で行われたことが、地主への補償金支払いの書類が近年発見されたことで確認された。最初の発掘地点については疑問の余地があると言う。

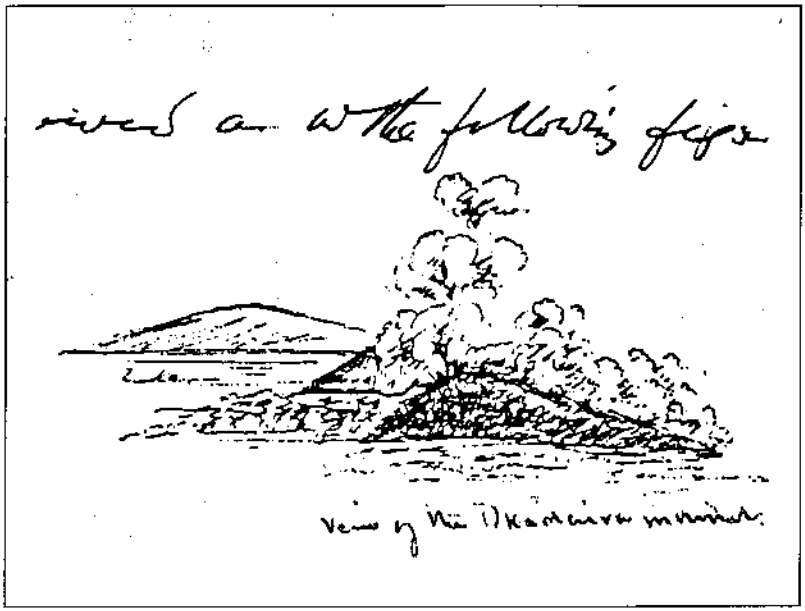
次の年に佐々木の主唱により貝墟碑が建てられた。碑面の字は「書をよくする」と言われた佐々木の筆であり、関係者二一名中の予備門・一高関連は佐々木・石川・白井・宮岡・原田・長谷部・三上・岩川・穂積重遠（明治三七年一高独法科卒。一高講師・東大教授・最高裁裁判官。一九一五年にモースと面識あり。）である。その他に浜田・臼井・松村瞭・小金井が名を連ねている。また文化財行政関係（柴田常恵／東大人類学出身。内務省、文部省などの顧問として「文化財保護行政の始め」と評される、および上田三平／福井師範教諭・内務省。文化財行政における柴田の後継者）と東大（原田・三上と黒板勝美／国史学教授）・京大（浜田と清野謙次／古人類学）の考古・歴史および関連学科の教授達も名を連ねている。

この時期には飯島は死去しており、同世代の動物学関係者は佐々木からは縁遠かったのであろうか。

二つの貝塚碑があることは早い時期から不思議がられていたようであるが、他方でこれが一般の人々に「大森貝塚」を印象づけた効果があったと思う。筆者もそうであった。

## 八、モース来日百年まで

昭和十年に佐々木は宮嶋・谷津直秀（明治三十年一高工科卒。東大動物学教授・臨海実験所長）らと相談して東大内に「モース会」を結成して学会を開き出版を行って顕彰事業をした。生誕百年記念（昭和十三年）行事にはさらに長谷部・



**第5図　佐々木が描いた陸平貝塚のスケッチ**
佐原眞国立歴史民俗博物館副館長の御好意による。

三宅驤一（明治四十一―大正六年一高理科講師）が加わった。しかし佐々木はモース生誕百年の年に死去した。終生モースを敬慕して、考古・動物学両部門の関係者へ呼びかけての顕彰を続けた。

モース来日百年（昭和五十二年）記念にも幾つかの行事・記念誌発行があったが、一高関係者として故寺田和夫（昭和二十三年一高理科卒。東大文化人類学。「日本の人類学・角川文庫」の著書がある。）教授の名を見るだけになった。モースと予備門生達との緊密な交流のあった一つの時代がすでに終わったと感ずる。

近年、大森貝塚発掘事情の再検討および来日前のモースの事跡の調査のために、それぞれピーボディ博物館のモース文書が日本人研究者により再検討された。佐々木が陸平貝塚発掘の報告をした手紙が発見された（佐原眞国立歴史民俗博物館副館長による）。遺跡のスケッチが描かれていた。

モースの得た大森貝塚の土器、佐々木の得た陸平貝塚の土器（それぞれ一個ずつ）および有坂の弥生町土器が東大綜合研究博物館で常設展示されている。